

中学校 音楽科 部会

部会長名 添田中学校 校長 岡本 豊俊
実践者名 大任中学校 主幹教諭 綾部 光浩

研究主題

「思考力・判断力・表現力等をはぐくむ音楽科学習指導と評価」
～鑑賞領域における知覚・感受力を高める支援を通して～

1 主題設定の理由

(1) 社会の要請から

平成 19 年に一部改正された学校教育法では、義務教育の目標が具体的に示され、さらにその達成に向けて小中学校で育成する学力についても明示された。この学校教育法で示された学校教育で育成する学力は、「基礎的・基本的な知識・技能の習得」「知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等」「学習意欲」の3つの要素からなる。そして、平成 24 年度から実施される学習指導要領では、この3つの要素を「確かな学力」として位置付けた。

これらは、以前起こった「学力論争」や OECD の PISA 調査の課題を受け、21 世紀に生きる子どもたちの教育の充実に向け、「生きる力」の主要な柱として、学力の3つ要素を調和的にはぐくむよう中央教育審議会において要請されたものである。

(2) これまでの音楽科教育から

学校教育法の義務教育の目標に、「生活を明るく豊かにする音楽、美術、文芸その他の芸術について基礎的な理解と技能を養うこと。」とある。これは音楽科の目標である「表現及び鑑賞の幅広い活動を通して、音楽を愛好する心情を育てるとともに、音楽に対する感性を豊かにし、音楽活動の基礎的な能力を伸ばし、音楽文化についての理解を深め、豊かな情操を養う。」の基となる目標だが、音楽科における教育の目的として、「音楽を通して生活を明るく豊かにするため」と明示されている。言い換えれば、音楽の学習内容が、現在や将来において自分の生活に生かすためのものということができる。

しかし、これまでの授業を振り返ると、歌い方や演奏の仕方を教師が範唱奏し、生徒はそれを模倣するだけの活動に終始する傾向があった。また、鑑賞では教師の一方的な楽曲解説の後、楽曲を聴かせ、主観的な感想を書いて終わるという授業も多々あった。さらに、音楽の諸記号等については、結果として知識として覚えさせることが目的となっていた。

これらのことから、音楽科における基礎的な知識や技能を確実に身につけさせ、生涯にわたって生活を明るく豊かにする「確かな学力」を身につけさせるために、思考力・判断力・表現力等をはぐくむことは大変意義深いといえる。

2 主題の意味

(1) 思考力・判断力・表現力等をはぐくむとは

中央教育審議会の答申で示された、基礎的・基本的な知識・技能の活用によって思考力・判断力・表現力等を育成する学習活動であり、具体的には次の内容である。

体験から感じ取ったことを表現する。

事実を正確に理解し伝達する。

概念・法則・意図などを解釈し、説明したり、解釈したりする。

情報を分析・評価し、論述する。

課題について、構想を立て実践し、評価・改善する。

互いの考えを伝え合い、自らの考えや集団の考えを発展させる。

さらに答申では、思考力・判断力・表現力等の基盤となるのは言語の能力であり、学習活動での学習内容を言語化すること、つまり、学習したことを記録・要約・説明・論述するといった言語活動の充実が必要であるとしている。

(2) 思考力・判断力・表現力をはぐくむ音楽科学習指導と評価とは

音楽科において、思考力・判断力・表現力をはぐくむために活用される基礎的・基本的な知識・技能は、平成24年度から実施される学習指導要領で新たに示された「共通事項」が知識であり、「各学年の目標及び内容」が技能である。

音楽科における思考力・判断力・表現力をはぐくむ学習指導とは、〔共通事項〕イの音楽の要素とそれらの働きを表す用語や記号の理解を支えとしながら、〔共通事項〕アの音楽の要素や要素同士の関連の知覚とそれらの働きが生み出す特質や雰囲気の影響を通して、歌唱、器楽、創作の表現内容や鑑賞の内容を思考・判断し、それを技能や批評文等によって具体化することである。

さらに、音楽科における思考力・判断力・表現力をはぐくむ学習指導と評価とは、音楽表現の創意工夫を通して表現の技能を高めたり、鑑賞の能力を高めるための、知覚・感受力をはぐくむ手立てとその達成の状況を見取るための方法と規準である。

(3) 鑑賞領域における知覚・感受力を高める支援とは

知覚は、音色、リズム、速度、旋律、テクスチャ、強弱、形式、構成などの音楽の要素や要素同士の関連を識別する能力である。これに対し感受は、音楽の要素や要素同士の関連によって生み出される雰囲気や特質を感性によって感じ取る能力である。

知覚力を高める支援とは、楽曲から音楽を形づくっている要素や要素同士の関連を分析的に知覚させるための、視覚教材の導入やわかりやすい説明・助言の工夫である。感受力を高める支援とは、感受した楽曲の雰囲気や特質を客観的に言葉にするための語彙の支援であり、言葉で説明したり批評する際のヒントとなる教材の工夫である。

3 研究の目標

鑑賞領域における、説明や批評をするための知覚・感受力を高める支援を通して、思考力・判断力・表現力をはぐくむ音楽科学習指導とその達成を見取る適切な評価方法について究明する。

4 研究仮説

鑑賞の授業において、説明や批評をする際に、音楽を形づくっている要素や要素同士の関連を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じさせるために適切な支援を行えば、生徒は主体的に思考・判断し、感じ取ったことや思いを表現できるようになる。

5 研究計画（授業計画）

(1) 題材名 曲の構成とオーケストラの響き

主教材 交響曲第五番八短調 ベートーヴェン作曲

(2) 目標

曲の構成やオーケストラの音色に関心をもち、意欲的に鑑賞活動する。

動機の特徴、主題の対比や変化とオーケストラの楽器の響きや音色などのかかりから、曲の特徴やよさを感じ取る。

曲の特徴やよさをとらえ、聴き取ったことを自分なりに批評する。

(3) 題材の指導計画

時	学習活動	教師の支援	評価規準		評価方法
			関心・意欲・態度	鑑賞の能力	
1	リズム動機やソナタ形式の特徴とオーケストラの楽器の音色に関心をもって鑑賞する。	視聴覚教材を用いリズム動機の特徴を聴き取らせる。また、物語の主人公を例に取り、その性格の対比からソナタ形式の仕組みを理解させる。	動機の特徴、主題の対比や変化とオーケストラの楽器に関心をもって、意欲的に鑑賞している。		様相観察 (評価用座席表)・学習プリント
2	解説文の書き方を理解し、リズム・旋律・音色の3つの要素から曲の特徴や良さを感じ取る。	食べ物の紹介文を引用し、解説文での表し方を理解させる。また、視聴覚教材を用い、ソナタ形式の各部ごとに思考を促す指示と語彙の支援を通して解説文の下書きをさせる。		動機の反復や変化、ソナタ形式や構造と楽器の響きを知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じ受している。	学習プリント
3 本時	解説文を作成し、学習班での交流を通し、「交響曲第五番八短調」の特徴やよさを説明する。	他の楽章の解説文を参考にしたり、個別に助言しながら作成意欲を引き出し、1楽章の解説文を作成させる。また、学習班の交流では必ず一つ以上説明のよさを見つけるよう指示する。	曲の構成やオーケストラの楽器の響きに関心を持ち、意欲的に解説文を書いている。	知覚・感受した内容から、解釈したり価値を考えたりし、音楽のよさや美しさを解説文として、自分なりに表現している。	様相観察 (評価用座席表)・学習プリント

6 指導の実際

(1) 本時の主眼

交響曲第五番八短調の特徴やよさを解説文としてまとめ、説明することができる。

(2) 本時の指導観

本時の学習では、これまでに作成した、作曲者に対する情報、リズム・旋律・音色など、音楽のよさや美しさを生み出している要素や働きについて自分なりに批評することを通して、鑑賞の能力を高めることをねらいとしている。解説文作成は初めての活動でもあり、作文の苦手な生徒にとっては高いハードルである。そこで、つかむ段階において本時の主活動である解説文の作成について、学習プリントで他の楽章の解説文を例示し、真似てよいことや聴き取ったことは最低1つでもよいことなど生徒の実態に応じた作成条件を示し作成意欲を高める。次に追求する段階では、動機や主題の変化を具体的に確認しながら、1つでも補足するよう促す。さらに作成時には、前時に意欲の低かった生徒を中心に机間巡視し、作成のヒントを与える。また、まとめの段階では、学習班に分かれ、解説文のよさを見つけるコミュニケーション活動を通して、生徒指導の機能である言語を通じた感性・情緒の基盤をはぐくむ。

(3) 準備

学習プリント 交響曲第五番八短調のテレビ番組DVD

(4) 展開

	学習内容・活動	指導上の留意点(配時)	形態	評価
つかむ	<p>学習のめあてと内容を確認する。(5分)</p>	<ul style="list-style-type: none"> 前時の学習プリントから、特徴とよさについて想起させる。 	一斉	
見通す	<ul style="list-style-type: none"> 学習プリントを通してめあてや解説文の内容をつかみ、本時の学習を見通す。 	<ul style="list-style-type: none"> 他の楽章の解説文や言葉のヒントカードを参考にすることを伝え、生徒の作成意欲を引き出す。 		
追求する	<p>下書きを補足し、解説文を作成をする。(30分)</p> <ul style="list-style-type: none"> 着目した要素とその働きについて下書きを見ながら視聴し、補足をする。 学習プリントから解説文に書く内容を知る。 他の楽章の解説文を参考にし、第1楽章の解説文を書く。 	<ul style="list-style-type: none"> 対照的な二つの主題など、聴き取るポイントを整理し、1つでも良いから補足するよう促す。 使われる楽器の違いや曲想の変化を「この楽器は?」「ここは?」という指示を通して補足を促す。 学習プリントの他の楽章の解説文を参考にしながらも、必ず自分の感想を加えて作成させる。 作成資料を見ながら資料にでてくる作曲家や動機・ソナタ形式などの言葉を使って説明させる。 机間巡視し、書けない生徒には学習プリントの評価の観点をヒントに支援する。 	個人	関2 技2
まとめ	<p>学習班で交流し、お互いのよさを見つける。(10分)</p> <ul style="list-style-type: none"> 評価の観点を基に相手の解説文を読みよさを見つける。 よいと思ったことを相手に伝える。 <p>鑑賞のまとめをする。(5分)</p>	<ul style="list-style-type: none"> 2人又は3人の学習班で分担し、1つ以上よさを見つけるようにする。 学習プリントの評価の観点の言葉を使って、「～が良いと思います。」などという言い方で相手に伝えさせる。 	学習班	
	<p>交響曲第五番八短調の特徴やよさは、リズム動機が全曲にわたって現れることで楽曲全体の統一が図られ、緊張感・不安感が持続しているところである。</p>			
	<ul style="list-style-type: none"> 曲の構成や特徴をとらえ、オーケストラの響きとのかかわりを感じ取って聴くことの大切さを理解する。 	<ul style="list-style-type: none"> 知識がなくても解説書等で曲の成り立ちや作曲家のエピソードを知ることで聴きやすくなることなど、将来的にも解説文を手がかりとして音楽を聴くことの意義を押しさえる。 		

7 研究のまとめ

本題材において、思考力・判断力・表現力等をはぐくむために、次のような知覚・感受力を高める支援を行った。

(1) 要素を知覚させるための支援

第1時、第2時において、リズム動機やソナタ形式の特徴とオーケストラの楽器の音色に関心をもって鑑賞し、音楽を構成する要素として知覚させるために、視聴覚教材を用いた。本学級は音楽鑑賞の苦手な生徒が多く、CDの聴取だけで「曲の構成とオーケストラの響き」を感得させることは難しい。そこで、佐渡裕によるテレビ番組での楽曲分析の視聴を通して、楽曲の特徴とオーケストラの楽器による表現の工夫を感じ取らせ、要素を知覚させる支援とした。生徒は佐渡さんのわかりやすい解説や実際の演奏から具体的に楽器による表現の意図や工夫を聴き取った。

(2) 感受した内容を言葉にする支援

音楽鑑賞が好きではないとする生徒の理由の一番は、聴き取ったことを感想として書くことである。特に語彙の乏しい本学級の生徒にとって批評文を書くことは高いハードルであり、授業の最初から関心・意欲の面で見つづることが予想された。また、音楽料として求められる言語活動は、言葉を覚えることではなく、思考・判断した内容を自分の知っている言葉を使って表現することである。そこで、思考の段階において聴き取った内容を言葉にする語彙の支援を行えば、多くの生徒が主体的に思考・判断し、感受した内容や思いを文章表現できるようになると考え、「言葉のヒントカード(部分)」(資料1)による支援を行った。この「言葉のヒントカード」は要素ごとにヒントとなるような言葉を集めたものである。生徒はこのヒントを参考にすることで聴き取ったことを意欲的に言語化した。

言葉のヒントカード	
(音色・リズム、速度、旋律、テクスチャ、強弱、形式、構成)	
○ 音色や旋律で用いる言葉	
気持ち	うれしい 楽しい 悲しい 勇ましい 心温まる 心強い 心細い わくわくする こわい 寂しい ゆうつな 苦しい 気だるい 心地よい 懐けない 懐かしい すがすがしい せつない 怒った 重苦しい 勇気が出る 気持ち悪い 誇らしい 物悲しい ほっとする 優雅な
性格	優しい 弱々しい 繊細な 情熱的な 静かな しつこい そっけない たくましい はなやかな 面白い さわやか 美しい か細い か弱い きれいな 軽い 愛らしい
見た目	美しい 色っぽい おとなしい 大人っぽい 神秘的 大きい 小さい かわいい たどたどしい 若い 地味な 頼みやすい 頼りない 激しい はかない 古臭い 高い 低い 深い 太い 細い 真新しい 短い でかい 長い 強い 弱い 力強い
状態	分りにくい わかりやすい すごい ものすごい するど い すまじい そつそつしい ひどい 幅広い 怪しい めずらしい やわらかい ややこしい 安い 新しい
色	赤い 黄色い 白っぽい 黒っぽい 明るい 淡い 薄暗い 輝かしい 暗い 洗い まぶしい
温度	温かい 暑い 寒い 涼しい 冷たい 生暖かい
味	甘酸っぱい 甘い 辛い 酸っぱい おいしい 苦い
形	分厚い 丸い 丸っこい 角張った つるつる
○ リズムで用いる言葉	
元気がよい いさましい 激しい 楽しい かわいい おどけた 軽快よく 軽い 規則正しい きこえない はねるような 軽かい たっぷりと 勇ましい するどい キラキラした	

資料1

(3) 解説文作成の支援(資料2)

解説文とはCDアルバムなどに付いている曲の音楽的な解説や演奏の特徴、作曲者や演奏家のエピソード等であり、一般的にはライナーノートという。しかし生徒たちにとってはあまりなじみがない。そこでわかりやすく理解させるために情報誌によるラーメンの紹介文を例にとり、ラーメンの要素、店主の工夫、食べた人の感想という紹介文の構造と、音楽を形づくっている要素と作曲者の工夫を曲の「特徴」、自分の感じたことを曲の「よさ」として、解説文の構造に合わせて説明した。また、実際の解説文による2~4楽章の解説文の例を示すことで、交響曲第五番八短調の特徴やよさを解説文としてまとめることができた。

解説文の書き方ヒントカード	
① 豚骨ラーメン ○○亭	
② 店主は長浜と久留米で修業した後、1987年に開業した。○○公園近くの小さな路地にある、博多を代表するラーメンの名店だ。カウンター6席とテーブルが10席しかなく、かなり小さな店なので、昼時は行列が店の外までできる。	
③ スープは、④豚の頭とゲンコツを10時間炊きこみ、ていねいにアク抜きし、さらに別の鍋に移して、前日のスープを継ぎ足して長時間煮込み、できたスープは、⑤コクがあるが、クセは極力おさえられている。	
④ 醤油で煮込んだモモ肉の③チャーシューは、⑤濃い味で、脂が抜けた昔ながらの出がらしタイプだ。ほかに具は④ネギのみと、⑤シンプンだ。熟練の店主は麺の④湯切りがうまく、しかも複数分をつくっても均等に分ける。	
⑤ 麺も④シコシコで、⑤コシがあっておいしい。	
ラーメン解説文の構造(書き方)	
①ラーメンの種類	店名 最初の1行
②店や店主の説明	2行~5行まで
③音楽の要素(スープ、麺、チャーシューなどの具材)	一重下線
④要素の特徴	波線
⑤食べた後の感想	二重下線
鑑賞曲の解説文(批評文)の書き方	
①曲名、作曲者名	
②作曲者の説明(教科書の説明から重要な部分を抜き出す)	
③音楽の要素(音色、リズム、速度、旋律、テクスチャ、強弱、形式、構成から、⑤で思ったことの根拠となる要素を選ぶ)	
④要素の特徴(作曲者が工夫したこと)	
⑤聴いた後の感想	
(言葉のヒントカードを参考に思ったことを書く)	

資料2

9 成果と今後の課題

これらの支援により、音楽の要素や要素同士の関連を思考・判断し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気、B評価以上の解説文として具体化できた生徒は約80%であった。

具体的には、研究のまとめにおける(1)の要素を知覚させる支援では、映像と分かりやすい解説により、視覚的に要素をイメージでき、「リズム動機の最初の八分休符はとてもドキドキする」や「第1主題がすごく緊張する感じなので第2主題は逆にとても安らかに感じる」などの思考を促すことができた。(2)の感受した内容を言葉にする支援では、言葉そのものの手助けもあったが、その言葉を手掛かりに自分の思いを他の適切な言葉にすることができ、感受した楽曲の雰囲気や特質を客観的に言葉にするために有効であった。(3)の解説文作成の支援では、どんな内容を解説文として書けばよいのかが分かり、ほとんどの生徒が意欲的に書いた。

課題としては、第1時において視聴覚教材を用いることは生徒の興味・関心を引き出し、思考を促すためには有効であったが、個人の感得した内容というよりも番組によって引き出された要素の知覚であり、全体的に同じような感想に陥りやすい。鑑賞の能力の評価Aの基準も思考の質ではなく、量で見取った。そのために視聴覚教材を見せっぱなしでなく、部分的・意図的に用いる必要があった。また、「言葉のヒントカード」による支援では、感受した内容を言語化するための手助けになったが、言葉がたくさんありすぎて、そのことに多くの時間を費やす生徒もいた。今後は適切な言葉の精選が必要である。

参考文献

- | | | | |
|--------------|-------------------|-------|----------|
| ・文部科学省 | 「中学校学習指導要領解説 音楽編」 | 平成20年 | 教育芸術社 |
| ・文部科学省 | 「中央教育審議会答申」 | 平成20年 | 文部科学省 HP |
| ・西園芳信・伊野義博編著 | 「中学校教育課程講座」 | 平成20年 | ぎょうせい |